

ネヘミヤ記4章 「城壁の建て直し」

1A 神の建物なる教会 1-3

2A 神による再建 4

1B そしりによる落胆 1-6

2B 敵の陰謀 7-15

1C 祈りによる見張り 7-9

2C 恐れとの戦い 10-15

3B 目を覚ましての工事 16-23

1C 武器を持ちながらの仕事 16-20

2C 寝ずの番 21-23

本文

今朝は、ネヘミヤ記4章を読んでいきたいと思います。

1A 神の建物なる教会 1-3

時は、ユダヤ人がバビロンから帰って来て、エルサレムに城壁を再建しようとしているところです。ダニエルが切に祈った祈りがありましたね、捕囚七十年目にして、ペルシヤの王クロスの命令によってユダヤ人たちが戻りました。ところが、そこには既に周囲の民が自分たちの土地であるかのように支配しており、エルサレムの町と城壁は荒れ果てたままになっていました。彼らは神殿を建て直すも、とてつもない阻止行動に遭い、一時中断します。けれども、預言者ハガイとゼカリヤの励ましによって、工事を再開します。そして神殿は完成します。

けれども、どうも状況はまだ改善してはいませんでした。というのは、城壁が崩されたままになっていたからです。エルサレムに神殿があっても、その中に人々が住めるような状況ではありませんでした。主が、預言者たちを通して数々のすばらしい約束、将来と希望に満ちた神のご計画を彼らは知らされてきました。けれども、帰還してもそこに多大なる困難が待ち構えていたのです。時は、ペルシヤ王アルタシャスタの時代で、そこで献酌官、すなわち側近として王に仕えていたネヘミヤがいました。彼は同胞の民の町エルサレムのことがとても気になっていました。その知らせをもたらした人がいます。1章3節ですが、こう言います。「あの州の捕囚からのがれて生き残った残りの者たちは、非常な困難の中にあり、またそしりを受けています。そのうえ、エルサレムの城壁はくずされ、その門は火で焼き払われたままです。」そこでネヘミヤは、座って泣き、断食して祈り、数日間を過ごしました。

今日の学びはここから始まります。神の宮を再建し、そして神の都であるエルサレムを再建する

話は、まさに、「外部の敵によって荒廃してしまっている状態から、神の働きが始まる」ことを意味しています。世において神の敵である悪魔が、私たちの生きている社会で、私たちの生活の中で荒廃をもたらしています。表向き大丈夫なように見せながら、実は一人一人が霊的には死んでおり、罪の中で死に、肉の欲によって生きて、やがて神の怒りを受けるように定められています。しかし、神が豊かに憐れんでくださり、キリストが死者の中から甦られたように、罪と死の中にいた者たちを神は生かしてくださるのです。そして、キリストにあって生かされた者たちが集まり、生ける神の建物となっているのが教会です。「エペソ 4:16 キリストによって、からだ全体は、一つ一つの部分はその力量にふさわしく働く力により、また、備えられたあらゆる結び目によって、しっかりと組み合わされ、結び合わされ、成長して、愛のうちに建てられるのです。」もはや、私たちは個人が個人的な修養のために集まっているのではありません。建物が一つ一つの部分が組み合わさって初めて神が生きておられることを証しするように、私たちは互いにキリストにあってしっかりと結ばれています。それぞれに、それぞれが果たすべき分があるのです。

そこで話をネヘミヤ記に戻します。ネヘミヤは、そこにいる祭司、主だった人々、代表者たち、工事をする人々を集めて、声掛けをしました。「2:17-18 あなたがたは、私たちの当面している困難を見ている。エルサレムは廃墟となり、その門は火で焼き払われたままである。さあ、エルサレムの城壁を建て直し、もうこれ以上そしりを受けないようにしよう。」そして、私に恵みを下さった私の神の御手のことと、また、王が私に話したことばを、彼らに告げた。そこで彼らは、「さあ、再建に取りかかろう。」と言って、この良い仕事に着手した。」城壁を建てることは、誹りをなくすことです。自分たちの尊厳が神によって与えられているはずなのに、そうならない状態が続いています。そして、敵があたかも勝利しているかのようになっています。しかし、神が栄光を取られ、人々が神の御顔の輝きの中で恵みと平安に守られているようなところが必要です。それで、このことは「良い仕事」であるとネヘミヤは言っています。私たちが教会に召されているということは、まさにこの良い仕事をしていることとなります。間もなく、新しい所に引っ越します。そしてその前に、明日はバプテスマ式があります。新しい変化を見るでしょう、それは良い変化です。主が確かに私たちをご自分の恵みで守ってくださり、平和と義、聖霊の喜びで満たしてくださるところの良い変化です。

ところがそれをよしとしないのが、周囲の有力者らでありました。「ホロン人サヌバラテと、アモン人で役人のトビヤ(2:19)」などです。彼らが、新しい神の働きに対して難癖を付けます。「いったい、何をやっているのか？こうやってペルシヤの王に反逆しているのか？と謗ったのです。私たちが、新しい神の働きの中に入る時に、必ず今までの体制、今までのやり方、自分が虐げられているような状態のままではいさせようとする力が働きます。要は、「あなたが信仰をもって生活をされると、私たちには迷惑なんだよ」という圧力です。そして、「信仰は良いが、教会にそんなにのめり込まないで。」と、教会生活にある醍醐味、神の家が建てられていくところの醍醐味から私たちを引きずり降ろそうとする力が働きます。こうした霊の戦いが私たちにはあります。

それでネヘミヤは、3章ですが、城壁においてそれぞれ工事にとりかかる割り当てを作りました。その中で家に住もうとしている者たちは、その家のそばの壁を修理しています。それは、自分の生活を主にあって守ってもらうことになるし、そして同時にエルサレムの町全体の安全と平和にもつながります。私たちが、それぞれの家庭で、それぞれの持ち場で壊れた城壁を建てていくということは、教会全体の益にもなっていくます。それで4章に入ります。

2A 神による再建 4

1B そしりによる落胆 1-6

4:1 サヌバラテは私たちが城壁を修復していることを聞くと、怒り、また非常に憤慨して、ユダヤ人たちをあざけた。4:2 彼はその同胞と、サマリヤの有力者たちの前で言った。「この哀れなユダヤ人たちは、いったい何をしているのか。あれを修復して、いけにえをささげようとするのか。一日で仕上げようとするのか。焼けてしまった石をちりあくたの山から生き返らせようとするのか。」4:3 彼のそばにいたアモン人トビヤもまた、「彼らの建て直している城壁なら、一匹の狐が上っても、その石垣をくずしてしまうだろう。」と言った。4:4 「お聞きください、私たちの神。私たちは軽蔑されています。彼らのそしりを彼らの頭に返し、彼らが捕囚の地でかすめ奪われるようにしてください。4:5 彼らの咎を赦すことなく、彼らの罪を御前からぬぐい去らないでください。彼らは建て直す者たちを侮辱したからです。」4:6 こうして、私たちは城壁を建て直し、城壁はみな、その高さの半分まで継ぎ合わされた。民に働く気があったからである。

いかがでしょうか、城壁が修復しているのを聞いて、敵どもが嘲っています。しかし、ネヘミヤが祈りました。すると、城壁はなんと高さの半分まで継ぎ合わされています。その祈りとは、彼らの嘲りに負けることなく、その工事に取りかかるやる気を与えるものだったのです。

ここで周囲の者たちが嘲っているのは、目で見えるものを見ての結果であります。なんせ、工事をしているのは素人集団です。銀細工人や香料作りの人たちがおり、不慣れな工事をしています。そして、そこには軍隊がいました。2節の「有力者」というのは軍隊と訳すことができます。何をやっているでしょうね、こんな弱々しい城壁を建てたところで、私たちの攻撃から守られるとでもいうのか。狐一匹が上ったら石垣が崩れてしまうだろう、と言っています。いかがでしょうか、私たちも不慣れな仕事をしています。だれもキリスト教会の熟練工などいません。誰もが、「一体、どうやって教会生活を歩むのか？」という戸惑いを覚えながら、聖日にいらしています。そして、その嘲りは、「いけにえ」にも向かっています。礼拝をするということが、神を信じていない人々にとっては、「何をやっているんだろうね。そんな益にならないことを。」と思うのです。私たちは絶えず、目に見える成果が礼拝生活には見えないので、目に見える成果を出す世からの誘惑を受けています。しかし真実は、神への礼拝が確立しているからこそ、神の支配の中で目に見える世界を生きることができます。それから、「一日で仕上げようとするのか。」という言葉も言っていますね。急ピッチで工事は進んでいるのですが、それでも、途方もない時間がかかりそうで、前進しているのかどうかわか

らないような状態でした。教会の建て上げは、本当に遅々として進まないように見えます。一人一人のキリスト者の成長が、とても遅いのではないかと自分自身を見ると感じます。そこを狙ってくるのです。

私たちに対して、悪魔が攻撃するのは必ず、「私たちの義」の部分であります。つまり、「あなたは、キリスト者としてなっていない。こんな状態だから、だめなのだ。」と責め立てるのです。そして、私たちが、聖霊による罪の自覚ではなく、人や状況、あるいは心の葛藤などによって、サタンによる罪定めという言葉聞いてしまいます。聖霊によるものか、サタンによるものかは一目瞭然です。私たちが失望させている、落ち込ませている、自分を責め立てている、こういった状況であれば、サタンによるものです。パウロは、ローマ 8 章でこのことを意識して、信仰によって義と認められた者たちの立ち位置を説明しています。「神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。(31 節)」という言葉から始めています。私たちの良心は、私たちが心を尽くして守らないといけないものです。そこで、ネヘミヤは、一見、攻撃的な祈りを捧げました。「4 お聞きください、私たちの神。私たちは軽蔑されています。彼らのそしりを彼らの頭に返し、彼らが捕囚の地でかすめ奪われるようにしてください。5 彼らの咎を赦すことなく、彼らの罪を御前からぬぐい去らないでください。彼らは建て直す者たちを侮辱したからです。」これは復讐を自分で行なうのではなく、主にお任せする祈りです。そして、神は建て直す者たちと共におられるという信仰から来ているものです。ゆえに、その結果、人々の良心が清く保たれていたのも、その喜びと平安の中で工事に対してやる気が出ていました。

2B 敵の陰謀 7-15

1C 祈りによる見張り 7-9

4:7 ところが、サヌバラテ、トビヤ、アラブ人、アモン人、アシュドデ人たちは、エルサレムの城壁の修復がはかどり、割れ目もふさがり始めたことを聞いたとき、非常に怒り、4:8 彼らはみな共にエルサレムに攻め入り、混乱を起こそうと陰謀を企てた。4:9 しかし私たちは、私たちの神に祈り、彼らに備えて日夜見張りを置いた。

敵による第一の攻撃は、「嘲り」でした。第二の攻撃はここにある、「内部からの混乱」です。ここで見てください、「エルサレムの城壁の修復がはかどり、割れ目もふさがり始めたことを聞いたとき」攻撃があったのです。私たちは霊の戦いについて知っておかなければいけないのは、攻撃がある時に実は勝っているのだということです。前進しているのだということです。敵陣に入り込んだのだ、ということです。サマリヤ人サヌバラテとアモン人トビヤだけでなく、アラブ人も、アシュドデ人も加わっています。今、サマリヤはエルサレムの北、アモンは東、アラブは南、アシュドデは西です。四方から一気に攻め入ろうと企んでいました。回りが敵に取り囲まれていたのです。四方から一気に攻めて、彼らに戦うのではなく、むしろ互いに混乱を起こして、相対立するように仕向けたのです。

敵は何とかして、私たちの間に、私たちの中に問題があると仕向けます。私たちが問題ではないのに、あたかも私たちの間に問題の原因があるかのように混乱させます。ここで、私たちが血肉の戦いをしているのではないことを気づくことは大切です。しかし、「神に祈り」ということ、神に祈ることで戦っていきました。そして祈ることによって、神がネヘミヤに日夜見張りを置く思いを与えられたのです。

2C 恐れとの戦い 10-15

4:10 そのとき、ユダの人々は言った。「荷をになう者の力は衰えているのに、ちりあくたは山をなしている。私たちは城壁を築くことはできない。」4:11 一方、私たちの敵は言った。「彼らの知らないうちに、また見ないうちに、彼らの真中にはいり込んで、彼らを殺し、その工事をやめさせよう。」4:12 そこで、彼らの近くに住んでいたユダヤ人たちがやって来て、四方から十回も私たちに言った。「私たちのところに戻って来てほしい。」

ついに、ユダヤ人たちの間に敵の陰謀が浸透してしまっていました。一つに、落胆です。「荷をになう者の力は衰えているのに、ちりあくたは山をなしている。私たちは城壁を築くことはできない。」と言っています。私たちは目の前に途方もない課題を突き付けられた時に、圧倒されます。神殿の再建の時もそうでしたが、ゼカリヤ書 4 章で主が総督ゼルバベルを励まされました。「『権力によらず、能力によらず、わたしの霊によって。』と万軍の主は仰せられる。大きな山よ。おまえは何者だ。ゼルバベルの前で平地となれ。彼は、『恵みあれ。これに恵みあれ。』と叫びながら、かしら石を運び出そう。(6-7 節)」しかし、今、聖霊の力ではなく人の力に注目してしまったので、意気消沈しています。

一度、このように心に敵の思いが入ってくると、敵はさらに攻撃して、錯乱させます。ここで、「彼らの近くに住んでいたユダヤ人たちがやって来て、四方から十回も私たちに言った。「私たちのところに戻って来てほしい。」」と言っています。敵に最も近いところに住んでいた人々で、最も敵のそそのかしを吹き込まれている人々です。それで、「私たちの生活がこんなに困難なのに、どうして城壁工事などするのですか？」とネヘミヤに要求しているのです。主に対して集中するのではなく、主に関する事、御霊に関する事から気を逸らして、自分たちのこと、関わりのないことに取り込ませようと、錯乱させるのです。そこで指導者ネヘミヤの誘惑は、自分の治めている民のことなのだから、行ってあげなければいけないと思ってしまうことなのです。もしいかなかったら、なんて薄情な！と思われるかもしれません。しかし、彼は正しい判断を下しました。

4:13 そこで私は、民をその家族ごとに、城壁のうしろの低い所の、空地に、剣や槍や弓を持たせて配置した。4:14 私は彼らが恐れているのを見て立ち上がり、おもだった人々や、代表者たち、およびその他の人々に言った。「彼らを恐れてはならない。大いなる恐るべき主を覚え、自分たちの兄弟、息子、娘、妻、また家のために戦いなさい。」

ネヘミヤは、困っているユダヤ人のところに行くのではなく、むしろ彼らを一つ所に集めました。そして武器を持たせます。これまでは、一部の人が見張りをしていたのですが、そうではなく、それぞれが武器を持ちます。それでも、襲われるのではないかと恐れている彼らに対して、激励します。「彼らを恐れてはならない。大いなる恐るべき主を覚え、自分たちの兄弟、息子、娘、妻、また家のために戦いなさい。」彼らに戦う心を起こさせました。そうです、彼らが何か悪いことをしているのではないのです、それは敵から吹き込まれた嘘です。いろいろ心配していることは、実は周囲の人々を恐れている、人への恐れから来ていたものです。そこで、「大いなる恐るべき主を覚え」と言ったのです。恐れるべき方は神である、と言っています。人の目を気にするのではなく、神の目を気にするのです。そして、これまで工事だけをしていたところから、彼らに戦いの武器を持たせたのです。

そうです、私たちは武器を取るべきなのです。もちろん物理的な武器ではありません。パウロがこう言いました。「2 コリント 6:7 真理のことばと神の力とにより、また、左右の手に持っている義の武器により」「10:4 私たちの戦いの武器は、肉の物ではなく、神の御前で、要塞をも破るほどに力のあるものです。」私たちは、徹底的に受身になるように教えられてきました。まさか武器をもって、敵に戦うことなどやってはいけなさと教えられてきました。今、国の戦争の話をしているのではなく、例えば自分の愛する妻や子どもに不当なことをする人々がいたら、夫あるいは父はどう対処するでしょうか？相手に対峙します。相手が、彼女に手を触れるものなら何が起こっても知らないぞ、という空気、覇気を感じさせるようにします。それが抑止力となり、相手をおじげさせるのです。私たちは、霊的な判断、識別においてこのような積極性、攻撃性が必要です。霊的な安全保障が必要です。「この人たちに、何か混乱させるようなことがあれば、ただではおかない。」という覇気が必要です。私たちが主によって与えられた愛は、弱い愛ではなく、復活の命に支えられた強い、力ある愛です。

4:15 私たちの敵が、彼らのたくらみは私たちに悟られ、神がそれを打ちこわされたということを聞いたとき、私たちはみな、城壁に帰り、それぞれ自分の工事に戻った。

「彼らのたくらみは私たちに悟られ」と言っています。そうです、企みであることを悟るところが、勝負所です。企み、敵の攻撃を敵の攻撃だと悟るまでが大変で、それまでは混乱します。注意散漫にさせられます。けれども、主がそれが企みなのだと悟らせてくださいます。それで主が打ち壊してくださるのです。こうやって、彼らが戦わずして、敵が去っていきました。これを抑止力と言います。圧倒的な戦う意志によって、かえって相手の意志を喪失させるのです。

3B 目を覚ましての工事 16-23

そしてネヘミヤは、決して戦いの姿勢の手を緩めませんでした。

1C 武器を持ちながらの仕事 16-20

4:16 その日以来、私に仕える若い者の半分は工事を続け、他の半分は、槍や、盾、弓、よろいで身を固めていた。一方、隊長たちはユダの全家を守った。4:17 城壁を築く者たち、荷をかついで運ぶ者たちは、片手で仕事をし、片手に投げ槍を堅く握っていた。4:18 築く者は、それぞれ剣を腰にして築き、角笛を吹き鳴らす者は、私のそばにいた。

ネヘミヤは、防衛体制を、これを機会にして固めました。若者の半分のみが工事をしています。残りを武装させています。それから、工事をしている者たちがその作業をしながら、なんと武器ももたせています。なぜなら、それぞれが散らばっており、工事をしているからであり、そこで安全を守るにしても、自分たちのことを自分たちで守らないと隙が見えてしまうからです。ここが、とても大事です。皆さん一人一人が、それぞれの場で霊の戦いを戦い、霊的な武装をしないとはいけません。私たちはそれぞれが、人生に課題を持っています。エルサレムの破壊された城壁のように、破れ口が大きく開いている城壁のようになっているかもしれません。それをキリストにあって少しずつ、建て上げられて行くのです。その時に、その建て上げを阻もうとする勢力がいつもいるのだということに、目を覚まさないといけません。それで、私たちは霊的武装をするのです。

4:19 私はおもだった人々や、代表者たち、およびその他の人々に言った。「この工事は大きく、また広がっている。私たちは城壁の上で互いに遠く離れ離れになっている。4:20 どこでも、あなたがたが角笛の鳴るのを聞いたら、私たちのところに集まって来なさい。私たちの神が私たちのために戦ってくださるのだ。」

そうです、敵が攻めてきたら、一丸となって戦わないといけません。その合図が角笛です。何かが起これば角笛を吹かせて、みなが集まるようにしました。そして、この戦いは自分たちのものではなく、主が戦ってくださるのだということに再認識します。私たちが相集まるのは、まさに自分たちではなく、主ご自身が戦ってくださることを知るためです。私たちはとすると、自分で自分のことを戦わないといけな思ってしまう。けれども、心をつにして集まり、主を礼拝する時に、主が自分たちの中で働いて、それでご自分のことを行なわれることを私たちは知ります。集まる時に、私たちは一気に戦うことができます。共に祈れるでしょう。励ましを受けるでしょう。交わって、心が主にあって和むでしょう。聖霊の喜び、平和、義が満ちるのを知るでしょう。主が戦ってくださっているのです。

2C 寝ずの番 21-23

4:21 こうして、私たちはこの工事を進めたが、その半分の者は、夜明けから星の現われる時まで、槍を手に取っていた。4:22 そのときまた、私は民に言った。「だれでも自分に仕える若い者といっしょにエルサレムのうちで夜を明かすようにしなさい。そうすれば、夜にも見張りがあり、昼には働くことができる。」4:23 私も、私の親類の者も、私に仕える若い者たちも、私を守る見張りの人々も、

私たちのうちのだれも、服を脱がず、それぞれ投げ槍を手にしていた。

ネヘミヤは、夜も寝ずの番を置きました。自分の親戚の者も含めて、えこひいきせずに若者に見張りをさせました。服も脱がせませんでした。目を覚まし、見張っていたのです。私たちが祈るのはこのためです。手を緩めないで祈るのは、このためです。「すべての祈りと願いを用いて、どんなときにも御霊によって祈りなさい。そのためには絶えず目をさまして、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くし、また祈りなさい。(エペソ 6:18)」